

編集後記

旭川医科大学一般教育紀要第31号をお届け致します。ご高覧のほど宜しくお願い申し上げます。

本号にて刊行の区切りをつけさせていただきます。

長年にわたりご理解とご厚誼を賜ったことにつきまして感謝の意を表します。

この機会に望むらくは、本学が世紀の変わり目の頃から大学合理化のもと、地域性（いわゆるガラパゴス化）の旗幟を鮮明にし、ますます総合的未來予持の感覚から遠ざかり、ネーションワイドな視点を急速に失ったことに対する深刻な認識です。教育・研究環境において、この視点を軽視するならば、必ず將來、奇妙なほど等質で、個性や獨創性のない機能集團の色相が学内全体を覆うことでありましょう。形式的にボトムアップであり、実はトップダウンの当時の經營理念を鵜呑みにし、現場の多様な提言や真摯な批判に対して耳を塞ぐことを続けても、それによつては明るい未來の拓かれないことが判明してきました。何よりも学内規定的に、また権力集中が裁量という名のもとに各構成員に対する生殺与奪の手段となり、それによつて無力化された、現場のかつての権能そのものを元に戻すことがまずは出発点となるでありましょう。一般教育について申し上げるならば、人員補充もない空き家の学科目を何の説明もなくこれ以上増加させぬよう全員結束して対処がなされるべきです。昨今、デジタル双方向講義なるものが時流に乗り遅れまいと立ち上がろうとしていますが、このまま進めば身体感覚の欠けた、ヴァーチャルな、単位取得のみに特化した講義の氾濫となるでありましょう。それによつて、おそらく訳あって外観は今後も温存される空き家がさらに増加するであろうことは必至です。現場に苦渋を強いるこうした環境から有能な人材が去ることはあつても、そこに集まることはけつしてありません。しかし、それこそが狙いなのかもしれません。ともかく、一般教育がかつての健全性を取り戻し、基礎・教養教育の重大な責務を果たしてゆくためには、降りかかる諸課題の内実が常に慎重に精査されねばなりません。

本学を今年度限りで早期退職する人間として、いささか遺言めいてはおりますが、満身の思いを込めて本学を28年間愛してきたがゆえに、以上贈る言葉として、僭越を顧みず、敢えて実情を申し上げた次第です。

皆様のご健勝とご發展を末永く祈念しております。

しろそうびいずこ しろそうび
白薔薇何処に散るも白薔薇

(T. T.)